# 崋椿系画家たちのハンコ

**令和7年12月6日(土)～令和8年2月8日(日)　　特別展示室**

現代ではペーパーレス化が進み、ハンコを捺す機会が少なくなってきました。江戸時代以降は絵画や書の落款とともにハンコが捺され、その作者であることを示していました。本展では、崋椿系画家が使用したハンコや絵画、書などに捺されたハンコに注目します。

| 指定 | 作者 | 作品名 | 制作年 | 材質 | 員数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 重文 | | 渡辺崋山使用印 | 江戸時代後期 | | 22顆 | |
| 市指 | | 椿椿山使用印 | 江戸時代後期 | | 6顆 | |
| 市指 | | 渡辺小華使用印 | 江戸時代後期～明治時代 | | 111顆 | |
| 市指 | | 渡辺如山使用印 | 江戸時代後期 | | 7顆 | |
| | | 白井烟嵓使用印 | 大正～昭和時代 | | 44顆 | |
| | | 渡辺崋山使用印の偽印 | 大正～昭和時代頃 | | 7顆 | |
| 参考出品 | | 江戸時代画家の偽印 | 大正～昭和時代頃 | | 6顆 | 椿椿山、谷文晁、池大雅、高久隆古、久隅守景など |
| | | 琢華堂画譜諸家題詠 | 明治36(1903)年 | 紙本墨書 | 1帖 | |
| | 鏑木華国 | 崋山先生印譜 | 昭和時代 | 紙本墨画 | 1帖 | |
| | 崋山会　発行 | 崋山印譜 | 昭和時代 | | 3冊 | |
| | 崋山会　発行 | 崋山先生印譜 | 昭和時代 | | 2冊 | 個人蔵<br>松林桂月・雪貞旧蔵 |
| | 椿　愛　編集 | 椿山印譜 | 明治16(1883)年 | | 1冊 | |
| | | 小華先生印譜 | 昭和時代 | | 1冊 | |
| | | 和楽堂印譜 | 大正7(1918)年 | | 1冊 | 個人蔵<br>松林桂月跋文 |
| | | 和楽堂印譜 | 明治～昭和時代 | | 6冊 | 個人蔵 |
| | | 桂月印譜 | 昭和時代頃 | | 3冊 | 個人蔵 |
| | | 桂月遊印 | 昭和時代頃 | | 2点 | 個人蔵 |
| | | 桂月雪貞印譜 | 昭和時代頃 | | 1冊 | 個人蔵 |
| | | 白井烟嵓印譜 | 昭和時代 | | 1冊 | |
| 重美 | 渡辺崋山 | 壬午図稿 | 文政5(1822)年 | 紙本墨画淡彩 | 1冊 | |
| 市指 | 渡辺崋山 | 母堂栄像稿 | 江戸時代・天保年間頃 | 紙本墨画淡彩 | 1幅 | |
| | 伝 呉春 | 客坐縮臨 | 江戸時代後期 | 紙本墨画淡彩 | 1冊 | 渡辺崋山旧蔵 |
| | 谷　文晁 | 画学斎図藁 | 文化9(1812)年 | 紙本墨画淡彩 | 1冊 | |
| | 椿　椿山 | 歳寒三友図 | 弘化元(1845)年 | 絹本着色 | 1幅 | 個人蔵 |
| | 椿　椿山 | 鶏冠図扇面 | 天保8(1837)年 | 紙本墨画淡彩 | 1幅 | 個人蔵 |
| | | 関羽像 | 文化10(1813)年 | 絹本着色 | 1幅 | 個人蔵<br>椿 椿山旧蔵 |
| | 渡辺小華 | 花鳥図屏風 | 明治5(1872)年 | 紙本墨画淡彩 | 六曲一双 | |
| | 渡辺如山 | 秋苑孤鶏図 | 天保6(1835)年頃 | 紙本墨画淡彩 | 1幅 | |
| | 高森碎巌 | 観世音 | 大正4(1915)年 | 絹本着色 | 1幅 | 個人蔵 |
| | 鏑木華国 | 崋山印影松之図 | 昭和7(1932)年 | 紙本墨画 | 1幅 | |
| | 鏑木華国 | 崋山椿山如山印譜 | 昭和時代頃 | 紙本墨画 | 1幅 | |
| | 鏑木華国 | 崋山椿山如山印譜 | 昭和時代頃 | 紙本墨画 | 1幅 | |
| | 松林桂月 | 深森鳥声【複製】 | | | 1幅 | |
| | 白井烟嵓 | 山湫雨余 | 昭和33(1958)年 | 紙本墨画 | 1幅 | |

重文＝重要文化財　　重美＝重要美術品　　市指＝田原市指定文化財　　表記のないものは当館所蔵

田原市博物館

＜作者紹介＞

谷 文晁　宝暦13（1763）年～天保11（1840）年

田安家家臣で詩人でもあった谷麓谷の子として江戸に生まれました。はじめ加藤文麗、渡辺玄対に絵を習いました。寛政4（1792）年、田安家出身の白河藩主松平定信の近習となり、『集古十種』などを編纂します。当時の画壇の重鎮として活躍し、渡辺崋山をはじめ多くの弟子を輩出しました。

渡辺崋山　寛政5（1793）年～天保12（1841）年

渡辺定通の長男として、江戸に生まれました。はじめ平山文鏡に師事し、白川芝山、金子金陵、谷文晁らに絵を習います。崋山は写実的な描写にこだわりました。特に肖像画を得意とし、西洋の陰影法を巧みに使い、独自の画風を確立しました。また重要文化財「一掃百態図」（当館蔵）など、当時の文化や風俗を伝える資料が残っています。

椿　椿山　享和元（1801）年～嘉永7（1854）年

はじめ金子金陵に師事しました。金陵が亡くなった後、同じく金陵の門下であった渡辺崋山の弟子になります。蛮社の獄で崋山が逮捕された際は、その救済に奔走しました。崋山没後は、崋山の家族を献身的に支えました。花鳥画を得意とし、輪郭線を描かない方法で花卉図などを多く制作しました。

渡辺小華　天保6（1835）年～明治20（1887）年

渡辺崋山の次男です。小華が7歳の時に、父である崋山が亡くなりました。その後、椿椿山の画塾に入門し、花鳥画の技法を習います。22歳の時、兄の立の死後、渡辺家の家督を継ぎ、30歳で田原藩の家老に就きました。明治維新後、内国勧業博覧会への出品や明治宮殿の杉戸絵など制作しました。

渡辺如山　文化13（1816）年～天保8（1837）年

渡辺崋山の弟です。学問や書画に優れ、将来を期待されましたが、わずか21歳で亡くなりました。若くして亡くなったため、作品は多く残っていません。14歳から椿椿山に師事し、天保7（1836）年刊行の『江戸現在広益諸家人名録』に掲載され、名を馳せていたことが窺われます。

野口幽谷　文政10（1827）年～明治31（1898）年

大工の棟梁源四郎の次男として江戸に生まれました。嘉永3（1850）年、椿椿山に師事し、花鳥画を習いました。明治5（1872）年のウィーン万国博覧会や明治10年の第1回内国勧業博覧会に出品し、画技を認められました。明治23年、橋本雅邦らとともに帝室技芸員に任命されました。弟子に椿山の孫である椿二山や松林桂月などがいます。

高森砕巌　弘化4（1847）年～大正6（1917）年

上総国（現在の千葉県）出身です。儒学を服部蘭台に、書を萩原秋巌に、絵を渡辺崋山の高弟である山本栞谷に習いました。明治維新後、司法省学校で法律を学び、熊本裁判所に赴任します。職を辞した後、絵画活動を続けるも、公的な展覧会には出品しませんでした。

鏑木華国　明治元（1868）年～昭和17（1942）年

田原藩士鏑木家の長男として生まれました。渡辺崋山の次男である渡辺小華に絵を習います。渡辺崋山の顕彰に尽力し、明治43（1910）年、崋山会が創立されると常務理事に就きました。また田原城二の丸櫓跡に崋山文庫を建設しました。

松林桂月　明治9（1876）年～昭和38（1963）年

山口県萩市に生まれました。明治26（1893）年に上京し、翌年、椿椿山を師とする野口幽谷の弟子になります。日本美術協会展や文展に出品し続け、南画界の重鎮と言われます。昭和19（1944）年、優秀な美術家へ与えられる帝室技芸員に任命され、昭和33（1958）年には文化勲章を受けました。

松林雪貞　明治13（1880）年～昭和45（1970）年

福島県白河の出身で、旧白河藩家老の家に生まれました。本名は松林孝子。明治29（1896）年、野口幽谷に師事し、翌年日本美術協会で二等褒状を受けました。明治34年、同門の伊藤篤（後に松林桂月）と結婚しました。その後は日本美術協会展に連続で入賞しますが、次第に展覧会への出品は減りました。写生に基づく花鳥画を多く描きました。

白井烟嵓　明治27（1894）年～昭和51（1976）年

豊橋市花田町に生まれました。16歳より従兄の白井永川に南画を学びます。松林桂月に師事し、大正9（1920）年、第2回帝展初入選以後、帝展や新文展に出品し、戦後は日展へ出品しました。昭和49（1974）年、渡辺崋山顕彰の功績が認められ、田原町町政功労者として表彰されました。